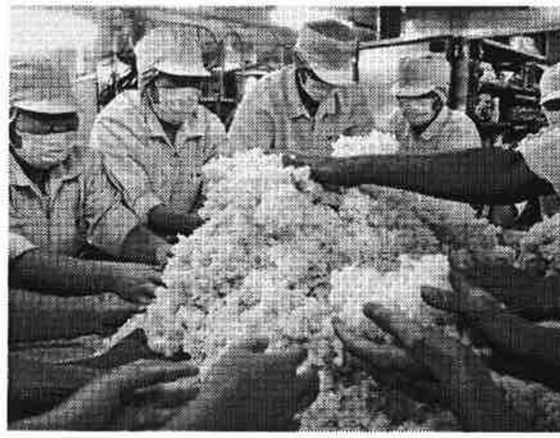
2019/11/20 14:04:31 社会部
2019/11/25 朝刊 教育 11版 S1125CK800B0000 通常版

教育

学ぶ—磨く—育つ



きわめる ■食品科(上)

都立農産高校の味噌づくりの実習。1年がかりの製造の第1段階は、米に麹菌をつける作業。60㌔の蒸し米の山に2年生10人の手が伸びる。「思ったより力が必要」。何度も混ぜて、振りかけた麹菌を行き渡らせる。

昨年仕込んだ「先輩の味」も試食。良い香りに芦田優太さんは「これが待っていると思うとモチベーションが上がる」と笑顔を見せつつ、「絶対に失敗できない」と気を引き締めた。

（東京都葛飾区）

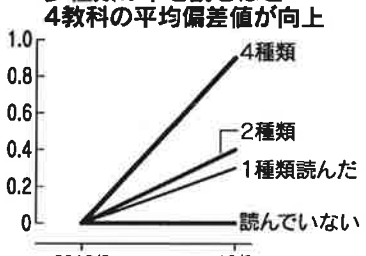
データ 多種類の読書で学力向上

様々な種類の本を読む子どもほど学力が向上することが、ベネッセ教育総合研究所（東京）の調査で分かった。2018年8月時点で小学5年の児童約4万4千人を1年かけて追跡調査し、19年10月に公表した。

本を「読み物」「自然・科学」「社会・歴史」「生き方」の4種類に分け、学力テストの結果と照合した。「国語・算数・理科・社会」の4教科の平均偏差値の上昇幅をみると、1種類の本を読んだ児童は0・3で、4種類は0・9だった。教科別では社会が多種類の本を読むほど成績が上がった。

1年間に読んだ本は1種類が29・3%で最も多く、2種類が29・2%、3種類は24・7%、4種類は16・9%だった。

多種類の本を読むほど4教科の平均偏差値が向上



(注)読んでいない児童の偏差値変化を基準として作成

4種類読んだ児童は少ない

(注)小数点第2位を四捨五入しているため合計が100にならない

揺らぐ高校の役割

人間関係築く教育を

生徒、孤立に不安■社会性獲得、困難に

古賀正義中央大学教授は、将来の進路を模索し多様な人間関係を築く場であった高校がその機能を失い、社会を支える「普通の市民」の育成が困難になっていると指摘する。

古賀 正義
中央大学教授

集団活動が自然に行え社会性に富んだ「普通の市民」を育てあげる高校教育の役割が揺らいでいる。大学進学率は60%に迫る勢いであり、人材養成は高学歴化している。他方、製造業などの高卒就職の受け皿は縮小し、非正規雇用が拡大して就職を先延ばしせざるをえない現実もある。従来は進学と人材の高度化は同義だったが、最近は進路先が決定できないが故の進学が増えた。社会に出られないための教育期間の延長、「教育モラトリアム」の出現である。

□□□

中退者が多く、教育困難高校といわれる高校でも大学や専門学校への進学率は上昇している。少子化で進学先の私学は学科試験から推薦やアドミッションオフィス(AO)入試に比重を移しつつあり、受験生の学力よりも高校での生活・学習の態度を問うようになった。勉学の努力よりも学級集団に適応することの方が、次の進学を左右するのだ。この過程で生徒は学校生活にこれまでになくリスクを感じるようになる。教室でコミュニケーションのできる仲間を見つけられない「孤立」への不安である。

年齢段階別の接触相手（%）

	15−19歳	20−24歳	25−29歳
家族（同居している人）	71.4	68	69
その他親族	11.9	15.2	21.6
地元の友人	47.6	36.8	34.4
高校・大学の友人	69.9	51.4	35.2
その他の友人	19.7	20.9	23.9
恋人	14.8	23.1	16.2
学校の先生	4.9	5.1	1.7
塾や習い事の先生	2.9	1.1	1.2
アルバイト仲間	6	9.3	4.2
職場の人	2.8	13.8	24.5
インターネット上の仲間	10.4	9.2	10.5
近所の人	0.5	1.4	2.3
その他	0.8	1.2	2

（出典）内閣府「子供・若者の意識に関する調査(16年度)」

東京都内の都立高校中退者を対象に行ったアンケート調査(2013年)で最も多い退学理由は、教師の指導への反発や問題行動などではなく、「遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった」という生活リズムの乱れだった。次が「友達とうまく関われなかった」「精神的に不安定だった」といった対人関係の歪（ひず）みだった。

生徒たちを中退に追いやるのは、学業勉学の重苦しさでも厳しい校則指導でもない。日々の集団でのルーティンな生活への不具合なのである。

しかも、中退者の2割は誰にも相談することなく退学を決めていた。相談相手がいても教師や仲間ではなく、身近な「母親」がほとんど(7割弱)である。十分なケアがえられないまま、多くの生徒が1年生の初めに高校を去っていた。「仲間や友人の助けがなかった」「学校に居場所がなかった」という理由で退学した生徒は数多い。

ひとり親世帯などで家庭の援助が受けにくくなれば、日々の通学習慣を維持することさえ困難になる。「私生活が乱れると、学校どころじゃなくなっちゃう」。ある女子生徒の言葉だ。

人間関係の困難は、低ランクの高校だけの現象ではない。よりランクが高い高校の生徒でも、いじめなど何かの拍子で教室から排除される不安と日々闘いながら暮らしている。常に細やかに気を配り、場の空気に合わせ、いつも話せる安心な仲間を持つことが学校生活の要諦になっている。

□□□

そればかりではない。学校生活の対人経験は、その後の人生にも強い影響を与えていく。そもそも同世代の仲間とのつながりが、学校という場でしか成立できなくなり始めているのである。

筆者が参画した内閣府による若者の居場所調査(16年)によると、20歳代後半になっても4割ほどの若者は同居家族以外では高校・大学時代の友人か中学時代の地元の友人としか、日々語り合ったりメールをやりとりしたりしていない。

こうした状況では、中退や不登校などで学校の対人関係から疎外されたら、その後の人生で別の人間関係を構築するのは容易ではない。そのような広がりのない閉じた関係に生きている若者が実に多いことがわかる。

実は正規雇用の若者でも職場や地域での日常の人付き合いは思ったほどには拡大しない。まして や無業者層では、ネット空間の他者も含めて同居家族以外に関係をもつ者は皆無だった。学校、特に10代後半の3年間を過ごす高校という場が、20代全般に及ぶ人間関係の資源（語れる仲間）を提供している。

さらに言えば、限定された人間関係（コアな他者）しか持たない若者ほど、この他者に対する評価が厳しくなる。家族以外と日常的に接触しない者は、「困った時は助けてくれる」といった家族の力を信頼しなくなる。同様に、高校時代の限られた友人としか関わらない者は、仲間の援助を否定的に評価する。閉じた関係は、閉塞的な対人ネットワークにますます期待し、そして失望するという悪循環を作り出す。

これまで高校は、将来の進路を模索し、行事や部活動などを通して多様な人間関係を感じ取り築く場であった。少しの勇み足も若気の至りも、大人になるための社会経験であり、意識されずともそれが学校生活のなかに埋め込まれていた。

だがいまや高校は、接触可能な相手を探し出し対人関係を支える唯一の場になっている。内閉する学校という場の意味づけを理解せず、ネット依存などを取り上げて、若者のコミュニケーション能力不足だけを批判してみても始まらない。

だからこそ、高校という場に、これまでの競争や選抜の論理から離れ社会参加のための窓口を構築していくこと、自立を援助できる人間関係を形成しやすい環境を取り戻すことが必要である。

社会を下支えしてきた普通の市民を育てる教育として、高校はその原点に立ち返る必要がある。

学びや発 給食を残さない

「命をいただく」考えて

「どうしたら残食を減らせるんだろう」。学校の栄養士である妹はいつも頭を抱えている。先日はこんな話も聞いた。「台風19号の被害で食材が届かず、近くのスーパーをはしごして、やっとの思いで集めた」。毎日同じ時間に給食があることを当たり前のように思っていた自分を反省した。

全国の学校給食の残さは年約5万トンに上り、大きな問題だ。受け持っている5年生も食が細い。偏食の子が多く、おかわりをする子は数人。「残して申し訳ない」という気持ちは全く感じられず4月から悩んでいた。

そんな子たちが最近ではほぼ毎日、完食するようになった。要因は私と児童の意識の変化である。私の意識を大きく変えてくれたのは妹の存在と、この夏訪れた中央アジアでの出来事だった。

遊牧民の家族と約1週間、一緒に暮らした。ある朝、父親がヤギを解体した。苦しませぬよう一瞬で急所を狙い、小さなナイフで丁寧にさばく様子は神聖だった。隣では母親が腸を洗い、血を詰めてソーセージを作る。便も燃料にし、無駄にする部分はない。ヤギへの敬意。これが命をいただくことなのだと学んだ。

2学期。児童の自由研究とともに夏の旅行記を教室に展示した。そっと解体の写真も添えて…。ヤンチャな男子2人がすぐに飛びつき、見たい子限定でその時の動画を見せた。驚く2人。最後に「給食、残さず食べたいね」と付け加えた。

その後、2人を中心に「給食会議」を開き、準備やおかわりの仕方を児童主体で試行錯誤しながら見直した。15分もかかっていた準備は今では8分程度になり、ゆっくり食べる余裕が生まれた。以前は残りがあると担任の私が配っていたが、今ではリーダーが呼び掛けてくれる。栄養士の方の苦労についても話した。

無理に食べさせることなく、給食の残りは減らせる。「命をいただく」ことについて、子どもと考えることから始めてはどうだろうか。（羽）

ポイント

高校中退の理由「なじめず」が多く

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、2018年度の高校中退者は4万8594人で中退率は1・4%。

中退の理由は別の高校や専修・各種学校への再入学や就職などを希望する「進路変更」が35・3%、「学校生活・学業不適応」が34・2%だった。

「不適応」の内訳は、「もともと高校生活に熱意がない」（全体の12・0%）、「人間関係がうまく保てない」（同7・2%）、「学校の雰囲気が合わない」（同5・2%）などで、高校生活になじめず中退する生徒が少なくない。（横）